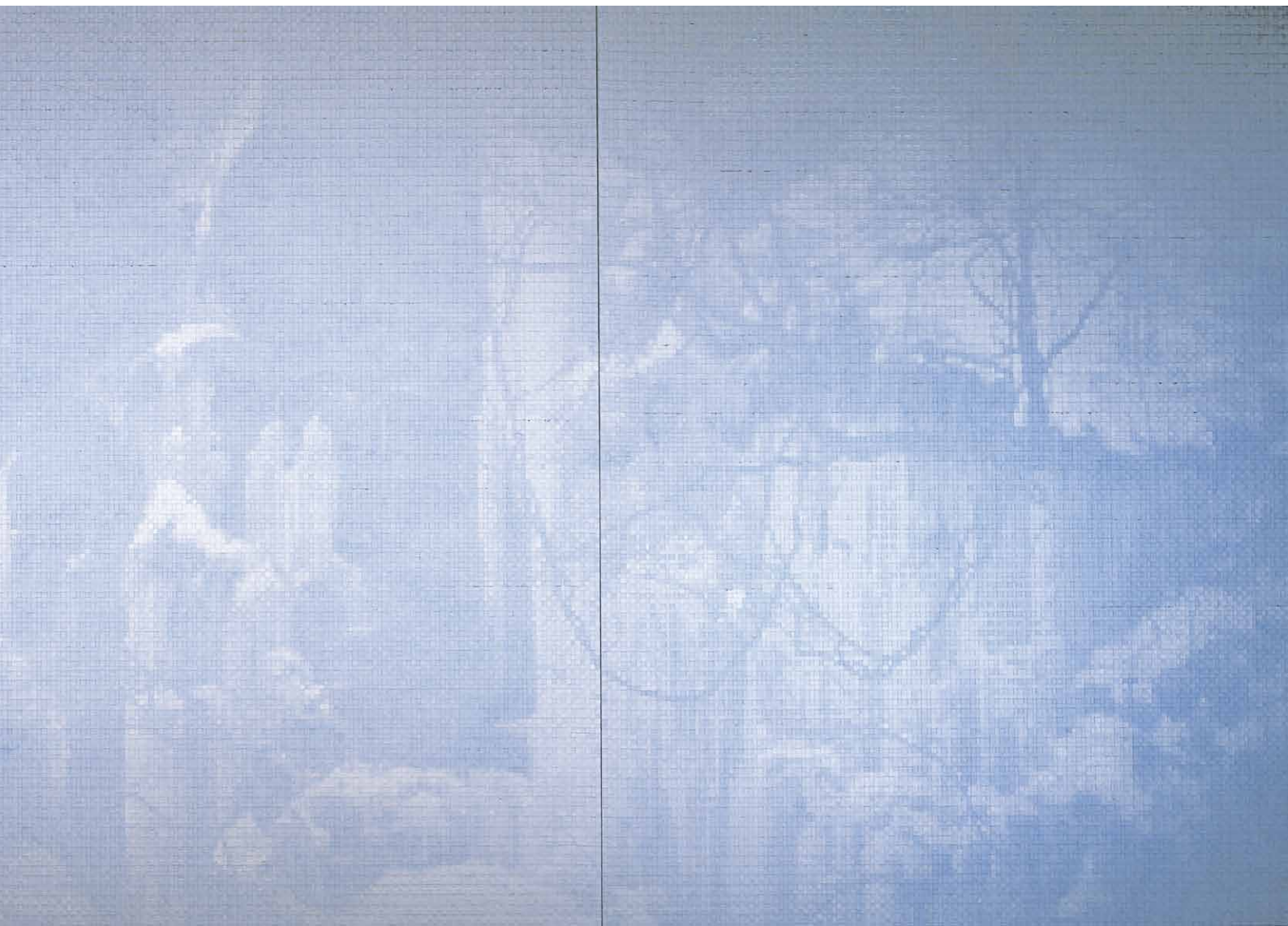


アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



大庭大介（一九八一—）
『OG (Ocean)』（部分）
二〇一四年
アクリル、綿布
二二八・〇×五三三・〇cm

作品に近づいて見ると、画面は、一センチ四方の格子に分割されている。絵具の柀目と柀目の境目に生じた、ばり（絵具を塗る際に生じた突起）や、絵具の厚みによる視覚的效果で、細長い布を編み込んでいるかのようにも見えるが、実際は、一柀ごとに塗り分けられている。柀目の数は、八二六五〇個。柀目描きといえば、当館所蔵の伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》を思い起こすのだが、この大庭大介の作品が、今日のな点は、写真イメージを、パソコン上で、格子に分割して、画表面に描き起こすという、制作過程を経ている点である。絵具には、昨今のリップクロスやアイシャドウなどにも使われる、偏光パールが含まれ、鑑賞者が、側面から正面に歩を移すと、画面は、金屏風とは、また違った、透明感のあるツヤと輝きを放つ。現代的な素材は、この作品を、外光が射す、明るい現代の建築空間に馴染むものになっている。

（上席学芸員 川谷承子）

No.
121
2016年度 | 春 |

葦山の代官屋敷と英国公使

館長 芳賀 徹

伊豆葦山の反射炉をはじめ訪ねたのは、一九六〇年代の半ば、東大大学院比較文学比較文化研究室の、春恒例の一泊旅行のときだった。

当時私は、駒場のフランス語教師になりたて、研究対象としては、十九世紀日本の比較文化史という新分野が、眼前に広がり始めていた。だが、当時の私は、まだその予感を樂しむのみ。葦山行きるときも、伊豆長岡の駅から春うららの野道をたどりながら、同行の女子学生たちが声を合わせて「おお、ひばり、空高く、愛の歌を唱う」と唱っていたことなどばかり、いまもよく憶えている。

葦山再訪の機会に恵まれたのは、ようやく昨年（二〇一五年）春四月初めのことだ。静岡商工会議所会頭の後藤康雄氏ら勉強好きの人たち数名と一年余り続けた徳川文明史セミナーを修善寺温泉合宿で終了すると、翌日はまず反射炉に向かった。だが、「明治日本の産業革命遺産」の一つとしてユネスコに指定されたばかりの反射炉は、茶店と公衆便所と桜の花に囲まれて、思っていたよりずっと小ぶ

りで、世界遺産などというよりはむしろ名所の一つという感じだった。

もっと大きく明快に、ペリーの黒船来航直後に着手されたこの炉の科学的国防史的意味合いや、佐野常民らによる佐賀藩の反射炉の成功との比較などの説明をつけないと、内外からの観光客に物足りない思いをさせるだろうーなどと語り合いながら、私たちは次に江川家の代官屋敷に向かった。私にとっては、初めての訪問だった。

反射炉にもまして、この江川邸こそ立派だった。大きな門扉を開けてもらって中に入ると、堂々たる入母屋造りの主屋（まきや）玄関が控え、幾つかの棟や蔵がみならずしりとした造りでつづいている、贅を排した堅牢な武家屋敷で、日当たりも風通しもよいに違いなく、幾つかの庭の大小の木立も池も風情があつて、江川家代々の教養の深さを感じさせる。いまもこの屋敷のどこか一室に、あの有名な肖像どおりの大きな黒い目玉の第三十六代当主英龍太郎左衛門坦庵（享和元年～安政二年、一八〇一～一八五五）がどっしりと

坐っているような気配さえする。

奥の座敷で、第四十二代現当主江川洋氏や江川文庫主務で江川英龍伝（角川SSC新書、二〇一四）の著者橋本敬之氏らと語り合ううちに、私は昔読んだ幕末の初代駐日英国公使ラザフォード・オーロコックの『大君の都』の一節をくつきりと思ひ起こさずにはいられなかった。一八五九年（安政六）夏、中国広東から攘夷いよいよ盛んな江戸に転任したこの血気盛んな外交官は、翌年九月、幕府の抵抗を排して外国人として最初の富士山登頂を敢行した。その帰途、陽暦の九月一四日、三島から熱海温泉に向かおうと山越えにかかったとき、その山麓で公使一行はいかにも美しい田園風景を眼の前にした。

「小さな居心地のよさそうな村落や家々が森や丘陵のふところにいだかれており、ここかしこには庭園の堀が見うけられ、大名の田舎の邸宅にいたる並木道がかいま見られた。（中略）これらのよく耕作された谷間を横切つて、非常なゆたかさのなかで家庭を営んでいる幸福で満

ち足りた暮らし向きのよさそうな住民を見てみるとこれが圧政に苦しみ、過酷な税金を取り立てられて窮乏している土地とはとても信じがたい。むしろ反対に、こんなに幸福で暮らし向きのよい農民はいないし、またこれほど温和で贈り物の豊富な風土はどこにもないという印象をいだかざるをえなかった。伊豆のこの地方（葦山）のもっとも富裕な地主は、かれの領地を通過したときに最初に儀仗兵を派遣してくれたの同一人物であった―かれの名は、江川太郎左衛門…」（山口光朝訳『大君の都』中、一九五頁、岩波文庫）

このときの江川家当主は、英龍が没してすでに五年、その三男英俊太郎左衛門であった。だがなによりも、オーロコックは、自分の新任地を極東の野蛮な後進国と見下してきていたのに、この伊豆葦山の旅のあたりからその偏見を訂正し始めていたということこそ興味深い。彼はこのときからしだいに日本が好きになり、この「徳川の平和」終焉間近なかなにお楽天的な民衆の生活ぶりに魅惑され、英国外交官としてこの国に工業化、近代化をもたらすべき自分の使命に疑いを抱きはじめてさえた。彼のこの意外なほどに正直なジャポニスムへの転向と、渡辺華山、江川英龍あるいは佐賀の佐野常民ら武士知識人の内からする西洋化への努力との対応の問題は、実に面白い。だがそのような対比は美術館の展示にはいかにも難しいことが残念である。

魅力を伝える美術館、これからも。

山下善也

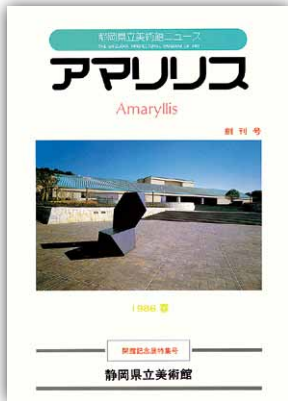
東京国立博物館主任研究員

三十周年おめでとうございます!!

僕が静岡県立美術館から京都国立博物館に移ったのは十年前、二十周年を迎えたあとの秋でした。

大学卒業後すぐ静岡県に就職しましたので、開館準備室勤務四年を含めて二十四年半、四半世紀も静岡にお世話になりました。よくする自己紹介は「出身は福岡県ですが九州よりも静岡の水（お酒?）をたくさん飲んでるので、血液の大半は静岡の水。身体は完全にスルガナイズされています…（笑）」。

それはさておき、この『アマリリス』の創刊号は、開館した昭和六十



「静岡県立美術館ニュース アマリリス」創刊号表紙画像 1986年春発行

一年四月発行。準備室ニュースの担当でしたので、創刊号も編集を担当させていただきました。創刊にあたって名前をどうするか館内で相談。「静岡県立美術館だより、でいいんじゃない?」という声があがるなか、「アマリリス」と提案したのが二十代の僕でした。

館前設置のトニー・スミスの彫刻名からの命名が採用されたわけですが、当初は「植物園の広報紙みたいだね」と茶化されたり…。すでに開館していた滋賀県立近代美術館の広報紙名が、同館の彫刻カルダー作「フラムिंगゴ」（これも動物園みたい）白状しますと、その発想をお借りしたのでした。

実は、愛される広報紙になるためには、個性的な名づけをすべき、無性格な名前だけは避けないと、そう考えての提案だったのです。別案があれば他の名前でもよかったのだけ

れど…。でも早三十年、すっかりなじんでいますよね。

「開館の時は大変だったでしょう? 苦労話をひとつ」なんて期待されるかもしれないませんが、昔話は大の苦手。僕は、まだ現役。三年前、京都から東京に転職しましたが勤め先が変わっても、学芸の仕事の基本は静岡の時と変わらず、つながっているのです。



学芸課「鈴木敬先生送別会」後の記念撮影（1994年3月18日、静岡駅新幹線ホーム）

たとえば、初代館長で中国絵画史学の泰斗、故・鈴木敬先生のある言葉は、今でも胸にあります。

創業は易く、守成は難し。中国の『唐書』に出てくる話です。唐の太宗が側近ふたりに「創業と守成と、どちらが難しいか」と尋ねました。「創業」とは新しく事業を始めること、「守成」とは築き上げたものを守り続けていくこと。房玄齡は「創業が難しい」、魏徵は「守成が難しい」と答えました。太宗は「創業の難事は過去の事。今は守成の難事にあたる」と答えたといいます。

新しく事を始めるよりも、守り続けていくことの難しさ。それを鈴木先生は、教えてくださったのです。三十周年を迎え、静岡県立美術館が「愛される館」であり続けること、そのために「何よりも作品の魅力を伝える館」であること、そのために「作品の魅力をつかめるよう館員自身が一番勉強すること」、その基本を守り続けていかれますように、そうエールを送りたいと思います。

ところで、アマリリスの花言葉は「誇り」「輝くばかりの美しさ」そして「おしゃべり」。(最後は駿河弁で) ぴったりにじゃ〜ん!

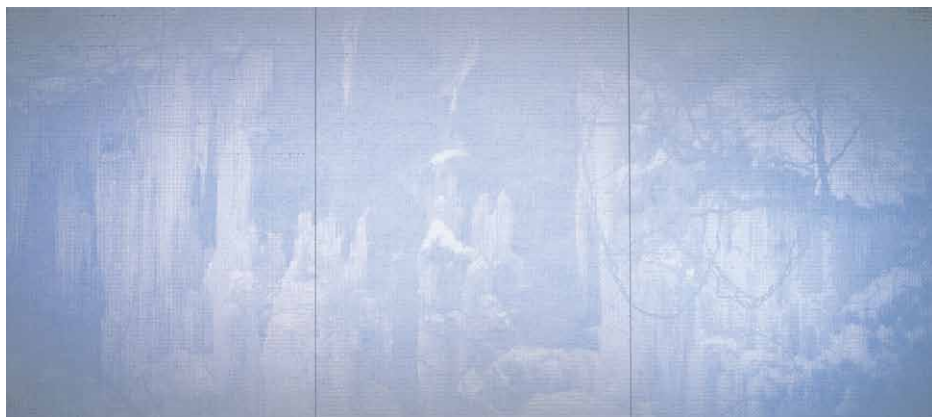


平成二十七年 新収蔵品・寄贈作品の紹介

静岡県立美術館は、開館以来「東西の風景画」、「静岡ゆかりの美術」などを収集方針の柱とし、コレクションを進めてまいりました。収蔵品の総数は二六〇〇件を超えるまでになりました。

平成二十七年度は、ご寄贈により、絵画一点、版画二点を、新たに収蔵することが出来ました。ここでは、それぞれの作品について、概要を紹介いたします。

静岡出身の作家、大庭大介（一九八一〜）の《LOG (Icefall)》は、寒い冬に、滝全体が凍結してできる風景（氷瀑）のイメージを、白と青の比率を変えた十二の色調を使い分けて、描き出した作品です。横五メートル、縦二メートルを超える大きな画面を、一センチ角程度の升目に分割して、一枘ずつ塗り分けています。絵具に含有された偏光パールの効果により、展示空間での照明のあたり方や、鑑賞者の視点が移動するにしたがって、描かれたイメージや色彩が、変容して見えます。



大庭大介《LOG (Icefall)》2014年

ロバート・ライマン（一九三〇〜）は、一九五〇年代半ばに白のモノクローム絵画を発表して以来、様々な



重野克明《幻のホームラン》2013年

支持体と素材、技法によって未知の領域を探求して来た、アメリカ出身の作家です。《Etching in Four Paris》は、一枚ごとに別々に刷られたイメージが、四枚目で重なり合う四枚組の作品です。コンセプトアルな志向と、遊び心がうかがえます。

重野克明（一九七五〜）は、表現力に富んだ線描を得意とし、銅版画を主としながら、幅の広い表現方法に取り組んでいます。日常の身近な風景や出来事に加えて、メディアに流通するイメージ、過去の美術作品などを源泉に組み立てた、現代感覚と懐かしさが同居する作品を制作しています。《幻のホームラン》は、中

高時代、野球部に所属して、野球に明け暮れた、清水の三保での思い出を描いた作品です。しかし、実際に描かれているのは、作家が現在住んでいる茨城県水戸の古い木造の自宅や、その周辺の景色、重野夫人、庭に置いているマネキン、架空の犬などで、青春時代の思い出をテーマにしたイメージになっています。

（上席学芸員 川谷承子）

平成二十七年 御寄贈者（五十音順）

太田正樹様、下山光悦様

美術館へのご支援に、感謝申し上げます。

なお、これらの作品は「新収蔵品展」にて、ご覧いただくことが出来ます。

新収蔵品展

四月五日（火）〜六月一九日（日）

関連イベント

学芸員によるフロアレクチャー

五月一日（日）

アーティストトーク

五月十五日（日）

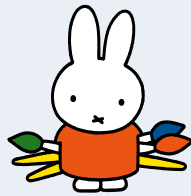
五月二十九日（日） 大庭大介

※いずれも午後二時より、申込不要です。

美術館に行こう！

ディック・ブルーナに学ぶ モダン・アートの楽しみ方

平成28年7月9日(土)～9月8日(木)



愛らしい姿とシンプルなかざねが特徴の絵本の主人公「ミッフィー(うさこちゃん)」は、

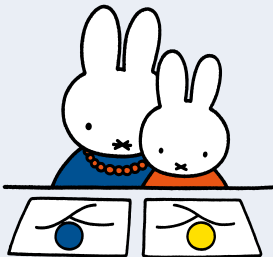
一九五五年にオランダで誕生しました。一九六四年には日本語版『ちいさなうさこちゃん』(福音館書店)が刊行されており、以来、ミッフィーとその仲間たちは人々の心を捉え、愛され続けています。

さて、ミッフィーの生みの親といえはディック・ブルーナ(一九二七

〜)ですが、祖国オランダにおいて、

彼は絵本作家であるとともにグラフィック・デザイナーとしても著名な存在です。ブルーナの絵本は一見簡単なつくりに見えますが、このシンプルな造形の背後には、デザイナーとしての膨大な仕事の蓄積があり、さらにその源にはモダン・アートに対する深い造詣が隠されています。ブルーナは、十代の頃にロンドンやパリの美術館等でモダン・アートと出会い、とくにマティスの、シンプルだけでも強く心を打つ作品に衝撃を受けたそうで、こうした体験がのちの創作活動につながっていったのでした。ゆつくりと丁寧に描かれた輪郭線や、赤・黄・青・緑の四色に茶とグレーを加えた、ブルーナ・カラーと呼ばれる独特の色。彼の作品を特徴付けるこうしたスタイルは、モダン・アートへの熱い思いと真摯な研究から生み出されたものなのです。

そのブルーナが、美術館をテーマにし



た絵本をつくっていることをご存知でしょうか。その名も『うさこちゃんびじゅつかんへいく』※。両親と一緒に初めて美術館を訪れたミッフィーは、彫刻と自分の姿を比べてみたり、抽象絵画をみて「自分でも描ける」と思ったり、様々に考え、感じて、美術館を満喫します。そこには作品と向き合う楽しさや驚きがあふれており、子どもたちの美術館デビューがこんなふうだったらなと思わずにはいられません。同時に、二十世紀以降のモダン・アートの展開を踏まえたストーリーは、実は大人にとっても示唆に富むものです。ブルーナはその独自の手法でもって、美術の楽しみ方を伝えてくれているのです。

この展覧会は、まさにその点に着目し、絵本『うさこちゃん びじゅつかんへいく』をガイドとして当館の所蔵品を展示し、あわせてブルーナによるデザイン・ワークの数々を紹介して、彼の制作の秘密に迫ろうとするものです。作品を見た後は、手を動かして創作をしてみようワークショップコーナーもあります。ミッフィーが感じた喜びや感動を、

当館展示室で、ぜひ多くの皆さんに味わってもらいたいと思います。

当館にとって、子どもを主な対象とする企画展を開催するのは初めてのことです。これから大人になっていく子どもたちに寄り添って一緒に成長していく美術館でありたい。開館三十周年を迎えた当館の新しい一面を、どうぞご覧ください。

(上席学芸員 石上充代)

※一九九七年オランダで刊行。日本では二〇〇八年に福音館書店より刊行。



草間彌生《最後の晩餐》静岡県立美術館蔵
ほかにも当館の現代美術を中心としたコレクションが出品されます。

狩野探幽筆「学古図帖」(個人蔵)の先にあるもの

—〈倣古図〉研究事始め—

主任学芸員 野田麻美

本号のアマリリスは開館三十周年の記念号で、発行日は四月一日。翌二日、私は美術史学会東支部にて発表を行う。内容は、今秋の当館三十周年記念展『徳川の平和―250年の美と叡智』（九月十七日～十一月三日）の第一章にて中心となる、狩野探幽とその周辺画家が描いた〈倣古図〉についてである。ここでは、発表、展覧会準備のために作成中の〈倣古図〉データベースについて触れ、〈倣古図〉研究の紹介を試みたい。

〈倣古図〉とは、和漢の巨匠の名画や画風に倣って描かれた図のことで、図中には「倣〇〇筆意」といったように、だれに倣って描かれたか記される事例が多い。本来、典拠となる作品があり、それをアレンジして描かれたのが〈倣古図〉と言える。〈倣古図〉は、江戸初期の巨匠・狩野探幽とその弟の安信をはじめとする江戸狩野派によって盛んに制作され、いくつもの画帖や画巻が現存している。〈倣古図〉は探幽ら江戸狩野派がいかなる古画を学び、規範としたのか、そして古典となる名画をいかにして体系化し、自己様式のうちに取り込んだのかといった問題を考える際、重要な作品群なのである。

私が〈倣古図〉に関心を抱いたきっかけは、前職で担当した『探幽3兄弟展―狩野探幽・尚信・安信―』（於群馬県立近代美術館、二〇一四年）にて拝借した、探幽の「学古図帖」(個人蔵)との出会いであった。展覧会の準備段階では探幽の様々な作品を拝見したが、とりわけ大きな衝撃を受けたのが「学古図帖」であった。「学古図帖」は、中・日

の名画に基づいて描かれた七十八図を表裏に貼り込んだ大部な画帖で、宋元の名家を主とする中国人画家六十五名に、巨勢金剛から探幽に至る十三名の日本人画家を加えた和漢の巨匠のスタイルによって描かれたとされる図で構成されており、山水・人物・花鳥などの画題が網羅的に扱われている。

『探幽3兄弟展』以来、私は「学古図帖」、そして〈倣古図〉に注目していた。来秋の『徳川の平和』展では、「学古図帖」は〈倣古図〉というジャンルの成立において規範となった重要作品である一方で、探幽晩年の様式的特徴をよく示す、創造性にあふれた作品であることを、論文にて具体的に考察し、「学古図帖」という記念碑的作品の本質に、少しでも迫りたいと思っている。そこで、手はじめに、「学古図帖」の図様を、探幽、そして探幽周辺で活躍した安信・狩野常信らが描いた倣古図の図様と比較し、その特徴を捉えようと試みている。

しかしながら、この試みは想像以上に困難なものとなっている。探幽周辺で制作された〈倣古図〉についての情報を集め始めたところ、かなり多くの作品があることが判明したからである。また、倣古図に描かれた図様、典拠となる画家の名前、表現などの比較考察が容易ではないことも分かった。現在作成中の〈倣古図〉関係の情報を入手したデータベースは一〇〇〇図を超え、『徳川の平和』展までにはさらに増えるに違いない。情報が増えれば増えるほど、例えば「花鳥図」という名の図が、他の倣

古図に描かれた花鳥図と同じ図様であることを思い起こす作業、そして情報分析は難しくなるのである。

〈倣古図〉の膨大な情報を入力する作業を通じて、私は、江戸狩野派における〈倣古図〉の制作が、今まで考えられている以上に重要な意味を有していたことを知った。従来、江戸狩野派の絵画制作において、「学画」、つまり古典となる名画に学ぶことや、規範となる図を模写することを絵画教育の基礎とする、いわゆる「粉本教育」が重視されていたことは、探幽が古画を模写した「探幽縮図」について数多くの先行研究があるように、様々な研究者から注目されてきた。だが、古画を模写した〈縮図〉に比べ、古画に倣い、自家様式によってアレンジして描いた〈倣古図〉の重要性については、十分検討されていないとは言い難い。〈倣古図〉では、参照された古典名画やその画風との距離は作品によって様々であり、また必ずしも原画が存在するとは限らない。典拠との距離、名画と描いた画家自身の様式の相違こそが〈倣古図〉の持つ創造的な側面であり、そこに〈縮図〉との相違が認められる。和漢の古画研究に注力した成果である〈縮図〉と〈倣古図〉は、「粉本教育」を支える二つの柱であるといっても過言ではないだろう。

データベースに入力した探幽とその周辺画家による倣古図の図様を比較分析すると、探幽の「学古図帖」の図様を忠実に描いた作例があり、「学古図帖」が後の〈倣古図〉の規範となる作品だったことが分かる(図



図1 狩野探幽「(倣樓観) 松鶴図」(「学古図帖」(個人蔵)のうち)

1)。「学古図帖」が「倣古図」というジャンル（ジャンル）の成立において、記念碑的作品であったことは疑いない。各倣古図作品の関係を分析すると、倣古図というジャンルが探幽周辺で確立、流行したことがうかがわれる。探幽による「学古図帖」の図様が安信や常信によって描きつがれ、図様が規範化、粉本化されていったことが、「倣古図」様式の確立において重要な意味を有している一方で、安信、常信らの倣古図には「雑画帖」化していく傾向の認められる点の特筆される。例えば安信他四名合作の「花鳥人物図画帖」(嬉遊会コレクション)、同じく安信他四名合作の「名画集」(個人蔵)は、安信晩年の天和二(一六八二)年頃に制作された画帖で、ともに和漢の様々な図様が描かれた雑画帖であるが、画題や図様には



図2 狩野探信「松鶴図」(狩野常信・探信「雑画帖」(個人蔵)のうち)

探幽や安信による「倣古図」と類似するものを含む。また、狩野常信・探信「雑画帖」(個人蔵)は、「学古図帖」と多数の図様が一致している(図2)。この三つの雑画帖においては典拠となる画家の名が消え、和様化した画題、図を多く含むといった共通点が指摘でき、中・日の巨匠に倣うという「倣古図」の体裁が消滅している。三つの画帖は、「倣古図」が安信や常信らの雑画帖の母体となっていたことを示唆する作品と言えよう。

「倣古図」から雑画帖へという流れは、安信の「人物花鳥画帖」(板橋区立美術館)、そして安信の弟子・英一蝶の「雑画帖」(大倉集古館)といった作品へと発展していく。

一蝶の「雑画帖」は江戸絵画らしいユーモアを備え、図のバリエーションが豊富であ

る点など、一蝶の代表作例として評価の高い作品だが、「憶僧日観(葡萄図)」、「大年筆意(小景図)」、「慕芝瑞流(竹林図)」といった図を含むことから、この作品の淵源に「倣古図」があることは間違いない。「倣古図」から雑画帖へという展開を追うことで、探幽における「倣古図」様式の成立、安信・常信による図様の規範化と雑画帖化、そして一蝶による換骨奪胎という流れが指摘できる。「倣古図」の確立と展開は、江戸狩野派における様式確立と展開に軌を一にしており、この点においても、「倣古図」が江戸狩野派にとって重要なジャンルだったことがうかがわれよう。

私は、「徳川の平和」展の準備を通じ、「倣古図」研究の確立をめざして、データベースの作成を進めている。未だ精度は低いが、この作業によって、作品や画家ごとにアレンジの特徴などを考察し、現存する倣古図の関係性や様式展開を明確にすることが可能になると考えている。また、「倣古図」研究を発展させるためには、江戸前期の倣古図のみに注目してはいけぬ。探幽周辺で成立した「倣古図」というジャンルは、江戸時代を通じて江戸狩野派に大きな影響を与えており、倣古図は幕末に至るまで描き継がれている。私の当面の目標は、「徳川の平和」展を契機とし、江戸狩野派における「倣古図」の史的展開を捉えることにある。「徳川の平和」展が、「倣古図」研究にとって本格的な始まりを告げる展覧会となれば幸いである。



本の窓

福原敏男著
『幕末江戸下町絵日記』
町絵師の暮らしとなりわい
渡辺出版 二〇一三年

幕末に絵筆一本で暮らしをたてていた福田永齋。中年、独身。

屏風、襖、天井画と、注文はとぎれず忙しい。その合間に相撲見物や宴会と、楽しみもたくさん。そんな町絵師の絵日記には、二日酔いで寝こむ、わびしくも微笑ましい姿までおさめられています。

こんな面白いものを古書店でみつけて本にした福原敏男氏は、篤実な祭礼文化史の研究者。頁を繰るとつれ、永齋と福原氏が重なってみえてくると言っては失礼か。「美術が暮らしの中におさまっていて、なんだかうらやましい」とは、本書の帯に寄せられた木下直之氏の言葉ですが、そう、なんだかしみじみうらやましくなる暮らしぶりなのです。

(学芸部長 泉万里)

開館三十周年おめでと〜う〜ざ〜います。

ミュージアムショップ 沖野良美

「東西の風景画」から始まった美術館も色々なジャンルの企画展や蔵品が増え、実技講座・教育普及活動・ボランティアの方々の地道な活動など幅広く進化しているように思います。間口が広がった事で様々な方々が来館して下さると嬉しいのですが、美術館の活動が意外に知られていないことを、お客様の話を伺っていると感じます。ショップも含めてその辺は課題なのかもしれません。

また、この美術館の企画に参加した子供たちが、その後作家として、デザイナーとして来館して下さる事があったり、他県からのお客様がリピートして何度も足を運んで下さったりすると、美術館の活動が少しずつでも結果を出しているようで、とても嬉しく励みになります。

私個人としてはロタン館の増設とその時にパーツに分かれて搬入された「地獄の門」を見た時の興奮、今ほど騒がれていない伊藤若冲の「動植綵絵」を初めて見てその美しさに圧倒された時の感覚、絵の中の物語の面白さや深さ、様々な版画技法と表現等いろいろな刺激を受けた思い出多い三十年でした。



ミュージアムショップ

ショップも何度かの改装を経て現在は二階で営業しておりますが、お客様の様々な要望を伺い、お土産用の安価な商品から美術に関する高価な商品や書籍を販売しております。場所同様、販売する商品もその時々で変化しております。勿論、館蔵品の変わらぬグッズも販売しております。時として相反するお客様からの要望や商品のバラつきに迷ったり悩んだりしながら、今後も出来るかぎりお客様の要望や美術館の活動に沿った商品を揃えていけたらと思っております。

皆様が便の悪さも楽しんで日常の雑事を忘れて楽しんでいただけよう努力してまいりますので、今後もよろしく願っています。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737
ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。
※詳細は美術館学芸課までお問い合わせください。
(Tel: 054-263-5857)



風景とロタンの静岡県立美術館

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742

このたび、開館30周年を記念した「静岡県立美術館30周年ロゴマーク」が完成。

美術館の30年の蓄積を踏まえ、新たな展開を目指し、次世代へつなげる県美の挑戦をシンプルな赤のラインで表現しました。

風景とロタンの静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

30th ANNIVERSARY

つながる、次へ

30周年のスタートを記念して、手帳型の年間スケジュールを制作しました。

展覧会情報を見るだけでなく、ご自身のスケジュールも記載できます。館内にて配布しており、無料でお持ち帰りいただけます。

当館所蔵作品をあしらった4種類の表紙を用意しましたので、お好きなデザインをお選びください。



友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。